

OKoTaC 通信

オコタック

2015年2月20日発行

NO.21



P 2 NPO活動報告(1)

第22回ワン・ワールド・フェスティバル『外国につながる子どもの「居場所」づくり』

P 3 NPO活動報告(2)

『オコタック会員交流会ー制度の狭間にいる子どもたちー』

『北河内ブロック識字・日本語交流会』をコーディネートしました

P 4 大阪府立高校の特別枠校紹介②

『八尾北高等学校』(八尾市)

P 5 Air Mail メキシコ便り⑩

『チリ・サンチャゴ、ビクトル・ハラ・スタジアム』

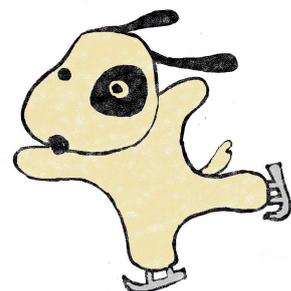
P 6 多文化な子ども@大阪 のニュース

『WaiWai トーク Part2』『春節の会』

P 7 みんなの日本語、みんなで NIHONGO !

『ある高校生が板書を見て感じたこと / 「日本の文字って…」』

P 8 イベント情報





おおさか子ども多文化センター 活動報告(1)

第22回ワン・ワールド・フェスティバル 『外国につながる子どもの「居場所」づくり』



「世界につながる国際協力のお祭り・新しい場所で出会い・ふれあい・学びあい」をテーマに今年も「第22回ワン・ワールド・フェスティバル」が2月7日(土)、8日(日)に開催されました。昨年までは天王寺区の大阪国際交流センターを中心に行われてきましたが、今年は北区の関西テレビ扇町スクエア・北区民センター・扇町公園に会場を移しての開催でした。

2012年からオコタックも参加していますが、今回はヒューライツ大阪、関西国際交流団体協議会と共催で、2日目にセミナー『外国につながる子どもたちの「居場所」づくり』をメビック扇町ステージで行いました。

このセミナーでは伊東浄江さん(愛知県・NPO法人トルシーダ代表)に「不就学の子どもの日本語教室、出口としての就労支援」、松本彩さん(関団協)に「NPO・地域の連携による放課後学習支援教室・Minami こども教室」、安野勝美さん(中学校教員)に「ジャパニーズ・フィリピン・チルドレン(JFC)を取り巻く問題と支援」の3つの取り組みについて紹介してもらいました。

トルシーダは豊田市保見団地で日本語ボランティア活動を行っています。その活動を行う中で生まれたのが「夢プロジェクト」。これは子どもたちが成長していくには、仕事について考えるキャリア教育が必要であるという気づきから生まれたもので、就労支援を通じて若者たちの将来の「夢」を育てたいという思いがこのプロジェクト名に込められています。同じような支援を行っている参加者のアンケートには、この取り組みに共感を寄せるものや参考になったという意見が綴られていました。

松本さんの発表はすでに新聞、テレビなどの報道でも知られている「Minami こども教室」についてです。中央区には大阪市立南小学校などに通う外国にルーツを持つ小学生が多数存在しますが、その中には単親家庭で夜間に子ども一人で過ごす場合も少なくありません。「教室」はこのような子どもたちを支援するため設置されました。つまり「夜の居場所」を提供するための事業です。立ち上げには多くの支援団体、ボランティアからの要請があり、それに応える形で南小学校が協力して、この「教室」が生まれました。これは一つのモデルケースとしても貴重な存在といえます。

安野さんにはJFCの問題や、東大阪市で実際に行われている子どもたちへの支援の様子を伝えていただきました。「高校受験」と「ダンス」をキーワードとして、子どもたちのダンスの映像も交えて報告がありました。

各報告には会場から質問、意見等の手が次々にあがり、関心の高さが感じられました。会場はガラス張りのオープンスペースだったので、通りすがりの人も立ち止まって耳を傾ける場面もあり、参加者数は私たち主催者の予想をはるかに上



参加者は予想を超える人数に

回り、100名を越える盛況ぶりで、遠くは、静岡県、香川県、愛知県、京都府、兵庫県等からの参加もありました。

このセミナーでは渡日の子どもの「居場所」が、それぞれの地域で作られ、子どもたちにとっては本当に大事な場所になっていることが再認識されました。彼らの存在とそれに関わる問題を明らかにできたのではないかと考えています。

全国にはまだまだ「居場所」を必要としている子どもたちが多く存在しています。今回のセミナーがきっかけで「居場所」づくりの活動の輪がひろがっていくことを願っています。(Y.H)



おおさか子ども多文化センター 活動報告(2)

オコタック会員交流会『制度の狭間にいる子どもたち —地域の日本語教室「こどもひろば」から見えてくるもの—』

会員間の交流・情報交換会を1月24日(土)にヒューライツ大阪・セミナー室で開きました。日頃、オコタックが開催している一般公開のセミナーや学習会と異なり、会員限定で交流の場を持つことを目的として昨年から行っています。

今回は、地域で渡日の子どもたちに日本語・学習支援などをはじめさまざまな支援活動をされている鶴飼聖子さん(こどもひろば代表)に、実例を示しながら、その活動についてお話しいただきました。

鶴飼さんの活動の一つに「応募資格審査」での支援があります。これは外国から来日した子どもが大阪の高校に入学するために府教委で受けなければならない審査です。この審査を受ける生徒の中には母国の中学校卒業後、高校への「ダイレクト入学」をめざす子ども、母国の高校在学中で来日し、高校への入学をめざす子ども、母国での義務教育を完了したものの、日本の高校入学のために必要な計9年間の教育を受けていない子どもなどがいます。このように「制度の狭間にいる子どもたち」は日本の学校制度に不案内なため、ともすれば教育を受ける機会を逃してしまうことになる状況があることを、鶴飼さんは指摘されました。そして、そんな母国と日本の教育制度の違いから戸惑い、途方に暮れる親子に寄り添う形でサポートを続けられています。府教委や学校などにも通訳者を伴い、親子とともに足を運ばれたりしながら、これまで50人を超える子どもを進学につなげることができたということなどを報告されました。(Y.H)



『北河内ブロック識字・日本語交流会』をコーディネートしました

2月8日(日)、北河内地区7市の識字・日本語よみかき学級の学習者と支援者、行政担当者が集い交流する「第15回北河内識字・日本語交流会」が、寝屋川市立エスポアールにて開催され、16の教室から計182名の参加がありました。オコタックは、今年度の幹事市の寝屋川市教育委員会からの依頼を受け、当日の分科会4つをコーディネート、内容企画から講師紹介まで協力させていただきました。

各分科会では、母国事情を紹介したのち「教育」「化粧」「食べ物」等、色々なテーマについて学習者や支援者がやりとりすることで、教室の枠を超えて日本語でのコミュニケーションの幅を広げるきっかけにしたり、日本に来て言語や文化・習慣の違いで困ったときにどのようにしたのか、学習者同士が意見やアドバイスを出し合ったり、学習者と支援者が一緒にいろいろな国の絵本を使って文化や言語の多様性を楽しむ中で、今後各地域の教室でも実践できる交流活動のヒントを持ち帰ってもらったりしました。

また、日本語の特徴と外国人にとっての難しさを考える分科会には多くの行政関係者の参加もあり、外国から来た人を地域で支えるために必要な視点を皆で共有しました。

交流会は、開会式から最後の全体会まで終始熱気と笑顔にあふれ、学習者の方々がこの催しへの参加をとても楽しみにされていた様子が強く伝わってきました。地域の多文化共生につながるこのような事業に、オコタックとして協働させていただけることを、嬉しく思っています。(A.N)





大阪府立高校の特別枠校紹介②

～ 八尾北高等学校 多文化共生部オアシス～

前号『OKoTaC20号』では渡日生徒を対象とする特別枠設置校に新しく加わる福井高校の学校紹介を掲載しました。この企画を継続し、今号から他の特別枠校の紹介を連載します。 (編集部)

* * * * *

八尾北高校は中国をはじめアジアを中心とした国々から日本に来た生徒を受け入れています。平成13年に渡日生徒の受け入れを始め、今年で13年目。この制度によって入学した生徒を学習・生活の両面で支援するのが「多文化共生部オアシス」(以下「オアシス」と略)です。今年度の「オアシス」生徒の出身国は、中国28名、ベトナム2名、フィリピン1名となっています。この「オアシス」に参加するには、外国から日本の学校に編入した時期が小学校4年生以降という条件がありますが、多くは中学校1～2年時に渡日しています。近年は日本の中学校を経ずに本校に入学する生徒(いわゆる「ダイレクト入学」)も増える傾向にあります。



近隣の小学校で龍の踊りを披露



日本語の授業

こうした生徒たちの高校生活の支援には4つの側面があります。それは(1)日本語の学習、(2)母語の学習、(3)自らのルーツに触れること、そして(4)日本語を母語とする生徒との関係づくりです。

日本語は「国語」(「現代文」etc)の時間に抽出授業で学習するほか、社会、数学、理科など各教科の授業でも抽出を行い、それぞれの教科内容を通じて専門用語や特有の表現などの日本語を学びます。時には小学校で使う漢字ドリルを教材として使うこともあります。母語は2年生以降、「中国語」「フィリピン語」など各言語の学習を学年・習熟度別に行います。

日本の高校で学びながら「自らのルーツ」に触れる機会として、「オアシス」ではダンスに取り組んでいます。ダンスといっても「中国の獅子舞」「中国の様々な民族の踊り」、また韓国の生徒がいたときは「韓国の民族舞踊」など母国の文化にちなんだ内容です。本校の文化祭のオープニングでは「オアシス」生徒がこうした出し物を披露し、生徒・保護者の方々から好評を得ています。

今年度から始まった一般生徒と「オアシス」生徒との交流会は、一般生徒と「オアシス」生徒とが気軽に友達関係をつくっていきけるようにとの願いから始まりました。元々仲が悪いわけではないのですが、「オアシス」生徒には日本語で一般生徒と会話するのが苦手な生徒も多く、友達になることは決して多いとは言えない現状があります。そこで少しでも両者の交流が深まればと始まったのが今回の企画。先日行われた第2回交流会では、一般生徒がけん玉・手作りいろはカルタで「オアシス」生徒と交流していました。



一般生徒と「オアシス」生徒との交流会

～ みんなで福笑い～

八尾北高校「オアシス」で3年間学んだ生徒たちの多くは、四年制大学・短大、あるいは専門学校へと進学します。社会に出た後、就業現場はもとより新渡日の人々の日本語サポート等幅広い分野で活躍しています。

〒581-0834 八尾市萱振町7-42 TEL 072-998-2100

(大阪府立八尾北高等学校 オアシス担当 田淵 幸一)



海外からのたよりをお届けします～

メキシコ便り⑩ 「チリ・サンチャゴ、ビクトル・ハラ・スタジアム」

(おおさかこども多文化センター会員・金野広美)

暖かかったイキークから再び寒いサンチャゴに戻ってきました。官公庁が集まる新市街とは異なり、ここ旧市街には、1973年、ピノチェットによる軍事クーデターでアジェンデ大統領が死んだモネダ宮殿をはじめとして、チリの歴史を知るうえで欠かせない博物館などが集中しています。

チリは1970年、人民連合のアジェンデを大統領に選び、世界で初めて民主的選挙による社会主義政権を誕生させました。しかし、それを嫌ったアメリカ合衆国の後押しで軍部のピノチェットがクーデターを

起こし、人民連合政府は倒されました。そしてその時、アジェンデ大統領をはじめ多くの人が軍部により殺されました。

銃撃を受け、大統領が亡くなったモネダ宮殿は、ちょうど何か政府の催しがあるとかで見学できませんでしたが、国立歴史博物館をはじめ、プレコロンビア芸術博物館、サンチャゴ博物館、国立美術館と4か所のミュージアムを回りました。その中でも私にとって衝撃だったのは国立歴史博物館で見たイキークのデモの様子を写した一連の写真と、軍事クーデターの勃発を伝える当時の新聞の生々しさでした。

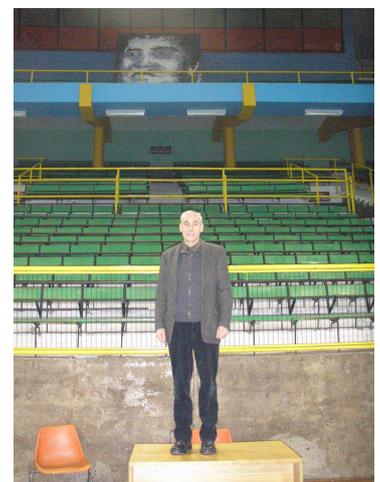


今回サンチャゴに来るにあたってどうしても見ておきたい場所がありました。それはクーデターでビクトル・ハラが捕えられ、殺されたスタジアムでした。

地下鉄の駅・セントラルから歩いて5分のところに、そのスタジアムは「エスタディオ・ビクトル・ハラ」と名前を変えて残っていました。ここの館長のルイス・カルデナス・キンターナさん=写真下、に、日本からビクトル・ハラが終焉の場所を見たくてやってきたというと、キンターナさんは快く中を案内してくださいました。

椅子席が4千という広さのこのスタジアムに、クーデター当時5千人が拘束されたそうです。柔和なお顔できれいなスペイン語を話されるルイスさんは52歳、彼も当時ここにビクトル・ハラとともに押し込められたひとりだそうで、ビクトル・ハラが坐っていた椅子、暴行を受けた場所、息をひきとったところなどを指し示しながら、ハラが9月11日に閉じ込められてから虐殺される16日までの6日間の様子を詳しく話してくださいました。

ここでは800人から千人が殺されたそうで、ハラ最期についても今までいろいろな本を読んではいましたが、実際にその現場を前にして、あまりにも悲惨すぎる生々しい映像が頭の中をめぐり、思わず顔をおおっていました。そのあともルイスさんとチリの新しい歌の運動のことなどをいろいろ話しながら、私がハラ代表曲「耕す者への祈り」が大好きで、日本語で歌っていたという、ぜひ聞かせてほしいといわれ、事務所のみんなの前で歌いました。ルイスさんは「日本語はわからないが、とても美しい言葉だと思う。あなたの歌もすばらしい」とほめてくださいました。そして「もう一度サンチャゴに来て、今度はスペイン語でも聞かせてください」といわれました。そういわれてとてもうれしかったのと同時に、なんだか宿題を出されたみたいで、今チリから帰ったばかりにもかかわらず、今度はスペイン語で「耕す者への祈り」をしっかり練習して、次は南のパタゴニアの方にも足をのばしてみようかな、などと考えている私です。





『WaiWai! トーク Part2 に参加して』

1月17日(土)、府立住吉高校でWaiWai!トーク Part2が開催され、11校、7カ国、20名の生徒が発表しました。当日の様子を、オコタック会員の荒木さんが報告くださいました——

私が WaiWai!トークに参加するようになって早5年が経ちました。毎回さまざまな国にルーツのある府立高校生が、母語で思いのスピーチを発表してくれます。

今回は「障がい者」「携帯電話」「外国籍」「在日韓国人」「食文化」など硬軟幅広いテーマで、いずれも生徒たちが外国にルーツがあるがゆえに苦労している諸課題が綴られていました。生徒たちは普段何を考え、どのように対処しているのか考えさせられました。いずれのスピーチも私がこれまで経験したことのない、また想像すらできない、とてもインパクトのある内容でした。生徒たちが抱えている悩みや苦しみ、それを克服しようとする意志の強さが表現され、私のみならず観客は皆感動とパワーと勇気をもたらしていることだと思います。たとえ言葉が通じなくとも、生徒たちの思いはこれほどまでに生き生きと伝わるものだと実感し、あらためて母語の素晴らしさを感じる機会となりました。



WaiWai!トークに出場する生徒たちは各高校の代表で、先生の指導の下、原稿を幾度も推敲し、声を出して練習を繰り返す。本番当日は本当に緊張していたと思います。堂々と発表する生徒たちに引き続きエールを送っていきたいと思っています。
(大阪府立布施北高等学校 教員 荒木聖加)

『春節の会』

2月7日(土)・8日(日)、大阪国際ユースホステルを会場に、中国帰国生・渡日生交流会主催の「春節の会」が開催されました。春節とは中国の旧正月のこと。中国では新暦の正月ではなく旧正月で祝います。都会に出稼ぎに出ている人もこの時だけは故郷に帰り、一族が勢ぞろいしてお祝いする大切な行事で、中国全土の交通は麻痺するほどです。今年の春節は新暦の2月19日ですが、一足早く7、8日に開催しました。



この会は、今から30年ほど前、大阪府の高校に点在していた中国帰国生が他の高校の仲間とつながりたいという願いから、高校の先生の手助けを得て開始されたものです。最初の頃は少人数でしたが、仲間と出会えるこの会は重要なものでした。それから30年、1年も欠かさずこの会は開催され続けてきました。

今年は約60名の高校生が参加し、歌や踊り、ゲーム、小品(コント)などで大いに楽しみました。生徒の実行委員会で進行しますが、司会者も堂に入ったもので、結構な役者振りを披露してくれます。小品も笑い転げる面白さ。とはいえ、すべて中国語で進行する

るので、字幕が欲しいところですが、言葉が良くわからなくても、その面白さは伝わってきますし、一芸のある先生も芸を披露しました。

一泊二日のこの会、生徒たちは夜遅くまで仲間と語り合っていました。来年もきっと開催されます。興味をもたれた方はぜひ見学にお越しください。
(Y.O)



みんなの日本語、みんなで NIHONGO !

外国にルーツをもつ子どもたちと関わる上で、避けて通ることのできないテーマ「にほんご」。日本語指導、日本語支援、日本語学習支援者養成、様々な「にほんご」現場の実践から、感じたこと・考えること・気づきや学びなどを書き綴り、お伝えする新コーナーです。

安田 乙世（おおさかこども多文化センター 副理事長・日本語教師）

「日本語教育」と聞いて、読者のみなさんは何を思い浮かべ、どんなことをイメージされるのだろうか？

一言で「日本語教育」といっても、実は色々ある。例えば、留学生の日本語教育、中国残留邦人やニューカマーなどの“日本に暮らす生活者”を対象とする日本語教育、そして、外国につながる子どもたちへの日本語教育と多岐にわたる。

小・中学校、高校などにおいて児童生徒と過ごす中で、また、日本語支援者を養成する実践の中で、毎回多くの新たな発見や気づきがある。特に、対象が「子ども」の場合、それぞれの事例は非常に個別的で多様性に富んでいる。つまり、それぞれの子どもが抱える事情や生活背景、帰属する（ルーツとする）文化や言語によって、その事例の様相が変わってくる。子どもの数だけ、エピソードがあり、対応の方法や支援の形も違ってくるといえる。

子どもと接して改めて「そうだったのか…」と気づき、驚かされる実践の現場は、日本語という言語や日本文化というものを、客観的に見つめなおす機会の連続である。ここでは、そんな「にほんご的」現場で体験したことを、紹介していきたいと思う。



【エピソード1】 ある高校生が板書を見て感じたこと / 「日本語の文字って…」



Aくんは中国語を母語とする生徒。

ある日、「先生、日本にも簡体字があるのですね。知りませんでした！」と嬉しそうに言うので、よく聞いてみると、授業の板書で見た「職」「国」「働」「門」「第」「前」「曜」「点」等の「略字」のことを指しているらしい。日本語には、すべての漢字ひとつひとつに対応する「簡体字」はないが、ある特定の漢字については「略字」というものがあることを説明したが、漢字を書き慣れるにつれ、何気なく「略字」を使う日本人は多いということ、そして、それは日本語を母語としない学習者にとっては、困惑の原因にもなり兼ねないことを改めて感じた。そして、日本語能力日進月歩の Aくんはもう一つ質問をした。「先生、『コメ』『ジャガイモ』『タマゴ』って外来語なんですか？」と…。



日本語教育では、文字学習の最初においてカタカナは外来語に使うと指導しているわけだから、この疑問は正論であろう。考えてみると、作物や食べ物、動物をわざわざカタカナ表記にしている現象は教科書によく見られる。表記として目立たせたいコピーライト等にもカタカナ語を使用する例も多い。

普段私たちは何気なく使い分けしているが、日本語の表記には「ひらがな」「カタカナ」「漢字」そして「ローマ字」と、4種類の文字を使う。表記体系が4種類あるということは、つまり、日本語を母語としない学習者が文字を学習する上で大きな負担となるということだ。そして、たとえ文字を覚えたとしても、Aくんのように、運用（＝使い方）面で疑問を感じる学習者は少なくないのかもしれない。

学習者の視点を借りて、日本語を再発見する面白さ。それは、日本語支援の醍醐味のひとつであろうと思う。「にほんご」は深い。日本語指導も深い。

(つづく)



イベント情報

▼「高校生活オリエンテーション」

日 時: 2015年3月28日(土) 13:00~16:00

場 所: 大阪府立今宮工科高等学校

対象者: 27年度大阪府立高校に入学する帰国・渡日生徒および保護者

内 容: 「学校のルール」「卒業後の進路」「学費」など、日本の高校生活で大切なこととお話します。

卒業生の体験談も聞くことができます。保護者の方と一緒に参加してください。(通訳あり)

問合せ先: 大阪府日本語教育支援センター(ピアにほんご) Tel 050-3513-1497

大阪府教育委員会高校課 Tel 06-6491-0351



会員継続 および 新規登録のお願い

おおさか子ども多文化センター(オコタック)は外国にルーツをもつ子どもたちの支援を目的に、大学教員、学校関係者、日本語教師、支援ボランティアなどを中心として2011年に発足し、この2月で4年になりました。この間、みなさまのご協力とご参加のもと、多くの活動をしてまいりました。私たちがかかわっている次の世代を担う子どもたちが必ず、幸せな人生を送るとともに、平和で安全安心な多文化社会を築いてくれるものと信じています。

さて、本年も会員継続手続きの時期がまいりました。世間ではアベノミクス等で景気が良くなると言われていますが、どういわけか、身の回りには私も含めその恩恵にあずかっている人は少ないようです。このような状況にもかかわらず、みなさまにご負担をお願いするのは誠に恐縮ではございますが、NPO活動をご支援いただくため、どうぞよろしくお願いいたします。

正会員: 会費 3,000 円/年 (別途入会金 1,000 円)

※OKoTaC 通信のご自宅へのご送付・各種イベント参加費の割引など、さまざまな特典があります。

賛助会員: 一口 1,000 円/年 (何口でも)

★新規ご入会のお問合せは下記までお願いします。会員の皆さまには、別途ご案内させていただきます。

NPO 法人 おおさか子ども多文化センター 代表 村上 自子

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8 階

Tel / Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com

URL http://okotac.org

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ぜ 味) けい)

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824)

口座名義『NPO法人 おおさか子ども多文化センター』

(リガナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター)

